Lindley Murray と進行形の制限

樋　口　万里子

１．はじめに

Lindley Murray の *English Grammar* は、1795年に世に出、19世紀を通じて比類なく驚異的な発刊数を誇った文法書である。Austin（2003: 37）は、この時代の多くの小説で、その名が文法書の代名詞として使われていると言う。当時の読者層に如何に同書が浸透していたかを示すものだろう。本稿では、この文法書における進行形の扱いが、第４版と第５版とで相矛盾していることに焦点を当てる。そこに関わる近代後期英語規範文法記述や、Murray の文法著述背景を通して、進行形とその制限規則との関係を問い直す。

「変化が認識されない状態」を表す動詞を、I am loving 等の様に、進行形に用いることは、現代標準英語では誤りとされているが、以前は使われていた。また、現在でも、口語や方言では生起する。興味深いのは、近代後期の実にあまたの英文法書に、I am loving が、進行形の代表例として登場することだ。18世紀で最も権威を誇った、Robert Lowth の *A Short Introduction to English Grammar*（1762: 56）でも然りだ。誰もが知る辞書編纂者、Noah Webster の *A Grammatical Institute, of the English Language* でも、1784年版では、love を使った進行形が、詳しい説明と共に23頁から４頁に亘り、生き生きと幾つも並んでいる。Murray の *English Grammar* にも、第１版から第４版まで（1795: 61, 1796: 72-73, 1797: 84, 1798: 81）は、be 動詞に現在分詞を加えた、全ての moods & tenses を通じて単純形の代わりに使える形式の代表例として、I am loving や I was loving が挙げられている。

ところが、驚くべき事に、第5版（1799: 82）では、I am loving の類いの進行形が禁じられている。併せて動詞も love から teach に換わっている。当該段落は、この動詞取替と、禁則を含む二文が追加されたこと以外は、4版のものと全く同じである。しかも、それらはいずれも、彼が active verb と呼ぶ範疇にある動詞の代表例として love を使った動詞の様々な形の、11頁に亘る列挙の最後にある。即ち、構成全体の流れにおいて、同じ並び同じ位置付けのところにあり、そこにはこの段落以外全く手が加えられていない。突然の、極めて不自然な、大転換である。

この不可解な現象をどう理解すればいいのだろうか。何故そのような目を疑うばかりのことが起こりうるのだろうか。どう考えればこの事実に辻褄の合う説明が成り立つだろうか。本稿はこれらの問への解を求める試みである。

その為にここではまず、1789年出版、James Pickbourn 著の動詞専門書 *A Dissertation on the English Verb* と Murray の文法書との関わりに目を向ける。Pickbourn（1789）は、Alston（1974）の活版印刷が始まってから18世紀までの文法書の殆どを網羅したリストの中でECCO（the 18th Century Collection Online）で検証可能な限りにおいて、進行形の制限に、初めて言及した書である。その禁則は、著者の現在単純形の用法に関する、他に例を見ない詳しい観察に基づいており、書評雑誌でも評価されている。Murray は、*English Grammar* の第2版から第5版で Pickbourn の名前を挙げ、その動詞への造詣の深さを賞賛している（1796: 58, 1797: 64, 1798: 62, 1799: 63）。Murray の単純現在形の用法説明の7割は、初刊から（おそらくその後の全ての版で）一貫して、明らかに Pickbourn から採り簡約したものである。従って本稿で問題にしている Murray の改訂も、Pickbourn（1789）と何らかの形で繋がっている可能性が高い。

合わせて考慮に入れるのは、Murray の著述を取り巻いていた、近代後期英文法書の背景にある社会的状況である。同一著者・同一タイトルの文法書の記述

が、僅か一年で180度転換する等というような事は、現代では考え難い。言語直観が、このように急変する事はない。しかも進行形は、英語の二大基幹構文である。しかし、当時進んでいた英語の標準化、そこで文法書が果たしていた役割、Murray の文法著述目的などを考えると、Pickbourn の打ち出した新しい見解を、Murray が自分の文法書に取り入れても不思議はない。それは、英国社会の激流の一面であって、時代の要請に即したものと見なせるのかもしれない。

本研究で要となるのは、進行形の、時代を通じた本質的な意味機能についての考察である。18世紀の小説や書簡等で、I am loving に類する進行形を検出するのは難しいことではない。そこでの使われ方は、Lowth（1762: 56）やそれを掘り下げて詳述した Webster（1784: 23-26）の、I am loving に関する記述と見事に整合する。のみならず、当時から現代までの、方言や口語を含め、典型的なものから周辺的と見られているものまで、進行形全体を包括的に捉える縁を与えてくれるように見える。更に、現代標準英語進行形がアスペクトと密接な関係にあることにも、合理的な説明が可能だ。I am loving タイプの進行形の頻度は、昔も今も書き言葉では高くはないかも知れないが、当時の英文法書に典型例として多く現われるだけの、何らかの理由が存在するように思われる。ここからは、Murray の第 4 版までの説明の理由が見えてくる。

次節ではまず、Pickbourn やその賛同者の進行形の捉え方が、Murray の第 5 版の記述に繋がっている可能性に言及する。3 節では、Murray の文法の社会的背景に目を向ける。それを踏まえ 4 節で、進行形の本質的な意味機能を、実際の使われ方や Webster（1784）の説明を通して追求する。そうすることによって、Murray の二つの版における不思議な相違への理解を深めたい。

2．Pickbourn（1789）の進行形の制限

Murray の進行形に関するパラグラフの加筆修正には、Pickborn（1789）の影

響を感じずにはいられない。Murray の第 5 版（1799: 82）は、general habits や *affections of the mind* を表す動詞は進行形に適さないとしているが、Pickbourn も「a continued energy や an *affection of the mind* を表す動詞は進行形にしない」と述べており、言葉に重なりがある。

Pickbourn は、27頁でそう記した後、I am loving を非難する。それを81頁で繰り返した上で、今度は I am loving に加え I am fearing, I am hating, I am approving, I am knowing も並べて禁止し、それは I love, I fear, I hate, I approve, I know と言うのだと高らかに唱える。彼はこの禁則を更に83頁でも反復しつつ、当時最も誉れ高き文法家 Lowth が、love を使った進行形を同構文の例にしていることを、真っ向から批判している。

Murray は、自著で幾度も Lowth の名前を挙げている。Alston も、Murray は非常に多くを Lowth から引いている、と Murray（1795）の 1968 年復刻版導入頁で記している。それは、Murray が、他の多くの文法家と同じく、基本的に Lowth を信奉していたことを示す。彼が第 1 版から第 4 版まで進行形の例文に I am loving を使ったのは自然な事だっただろう。それが第 5 版で翻った陰には、Pickbourn の力強さが見え隠れする。

Pickborn（1789）以前の近代後期英文法書には、I am loving を制限することに繋がる記述は見当たらない。そもそも進行形自体が登場することも、18世紀前半迄稀である。その後も、現在進行形を、現在時制、多くは分詞の項目で、単に単純現在形と並べるか、その代わりに使うもう一つの形として挙げ、（1a）の様に一行足らずで済ましているものが多い。

（1a） Greenwood: “All The Tenses of a *Verb Active* may be expressed by the *Verb Am*, and the *Active Participle*; as, *I am burning*, that is, *I burn* (1711:163).”
Fisher: the progressive form: “a beautiful variation in our active Verbs, in that in all the Times, as *I am writing* for *I write*; … (1753: 82).”

John Ward: (both *I write* and *I am writing* convey) "an action as now doing (1758: 98)."

Buchanan: (the progressive form) "exhibits a beautiful Variation (of the simple form); as, *I am burning*, for *I burn*… (1762: 125)."

William Ward: "*I am having* is the resolved tense of *I have* (1765: 196)."

Coote: "The present tense represents an action or circumstance as passing at the time in which it is mentioned; as, *I strike*, or *I am striking*; *I think*, or *I am thinking* (1788: 88)."

Shaw: "The *Present* Tense represents the Action as now doing; as I *dine*, or *am now dining* (1788: 62)."

現在進行形を英語独特の風変わりな表現として取り上げる Miege (1688: 69) に倣うものも多い。いずれも、現在進行形と単純現在形の区別には立ち入ってはいない。

それは、Pickborn 以後も (1b) の様に続く。19世紀の Cobbett や Barrett に至っては、(1c) の様に、単純明快に両者を等しいとする。

(1b) Devis: "instead of Present, *I read*, we may say *I am reading* (1795: 59)."

Burr: "The *present time* expresses the action as now doing; I write or am writing (1797: 9)."

(1c) Cobbett: "*I was working* means the same as *I worked* (1818: 135)."

Barrett: "*I run* is equal to *I am running* (1837: 65)."

彼等とて、違いは何かと迫られよくよく考えてみれば、微妙な差異を絞り出すことは出来たかもしれない。しかし、「動きや何らかの変化が認識されることを表している動詞は、進行形では使えない」という意味でのアスペクト制限は、少なくともこれらの文法家の意識に存在しているとは思えない。

但し二形式の違いに言及しているものが皆無と言う訳ではない。Lowth (1762:

56）や Webster（1784: 24-26）、Brittain（1788: 99-101）等では、単純形が表す意味に関しては、“general,” “vague,” “habitual,” “indefinite,” and/or “underdetermind” 等といった言葉が並ぶ一方、進行形には “a most actual,” “definite,” “determined” 等が見られる。しかし、やはりアスペクト制限とは直接繋らない。前述した様に、Lowth も Webster も、I am loving を進行形の例文として用いておりそこに違和感を覚えた筈はない[1]。Murray は、おそらく第 4 版迄、Lowth に従うことに、何らの疑問も抱くことはなかったであろう。

そういった中で Pickbourn は、単純現在形を、general proposition、habits, or repeated action、historical facts、historical narration 等を表し、時間副詞節にも現れる形として、7 頁を割き多くの具体例と共に説明し、異彩を放っている。現代の文法書にも並ぶこのような用法記述も、前例がない。彼は、この自説と Lowth の説明を踏まえ、その論理的結果であるかのように、単純形と相補分布をなす進行形の禁則を導入する。しかしそれは、Pickbourn が進行形を単純形との違いを全面に押し出したいが故に編み出された面もあるように見える。

Pickbourn（1789）の前書きの冒頭には、彼が著述に至ったきっかけが語られている。15年前、彼はあるフランス人から I loved, I did love, I have loved, I was loving の違いを尋ねられた。Pickbourn は、その場では言葉に窮し、その後当時の大家である Greenwood や Lowth、Priestly、Harris’s *Hermes* 等を紐解いたが満足できず、彼の探求が始まる。ここでひとつ注目すべきは、このフランス人が、質問の際「古今のどんな言語でも全く同じ事を意味する二つの時制が存在する等とは到底考えられない」と続けたことである。前書きの終わりに、Pickbourn は、「英語の真実と名誉の為に動詞を追求した」と綴っている。四形

[1] I am loving が使われたのは、ラテン語文法書に合わせただけだという指摘もあるが、進行形自体は、くだけた口語的な表現であり、関連性は薄い。I’m lovin’ it をラテン語由来の表現だとみるのは、いささか疑問に思わざるを得ない。

式には違いがある筈で、それを説明できない様では英語の名折れだと言わんばかりである。ある表現を取り上げて何度も見つめていると、その容認性が変わってしまうことは、よくあることである。それが自分の立てた理屈に合わせて起きることもある。現在進行形と単純現在形を most actual と vague という言葉で区別した Brittain（1788: 100）は、両者の意味を同一形式で表すフランス語に比べ、より豊かな細分表現のある英語の優位性を示すものとして受けとめている。二形式を識別し、誇りにしたいという意識には通じ合うものがある。ただ Pickbourn には、Lowth に準じたその様な曖昧な説明では満足できず、より明確にしたいという意識が働いたのではないだろうか。であれば進行形の制限は、英語の声価の為に生じた感すらある。Murray が Pickbourn の見解に賛同してもおかしくない。

Pickbourn（1789）は、書評でもまずまず好評を博している。*The Monthly Review*（1789: 175-181）は、辛口のコメントから始めつつも、最終的にはじっくり練られた論として評価している。*The Critical Review*（1790: 148-151）も、（2）に挙げる様に賞賛している。

（2） “… in general, coincides so closely with our own sentiment on the subject, that we cannot help thinking it well sounded. … he has treated the subject with much discernment, as well as perspicuity and precision（1790: 151）.”

The Analytical Review（1789: 66-67）に至っては、進行形の制限を明言したパラグラフをまるまる引用し、“the distinction is clear and judicious” と絶賛している。二形式の区別が高い評価に繋がっている。書評家達の間にも、曖昧に同じ様な事を表す二つの形に、明瞭な違いを感じさせる説明を希求する部分があったかもしれない。これらの書評が Murray の目に留った可能性は十分ある。

出版年からすると Murray が第 4 版を修正している段階で、最初に直接影響を受けたのは、もしかすると Knowles（1793）または Knowles（1796）の *Principles*

of English Grammar だった可能性もある。Tieken-Boon van Ostade (2011: 255) のグラフの中では、Knowles (1796) は、近代後期の規範文法の中でも最も禁止事項に満ちた書である。同書には、WITH CRITICAL REMARKS AND EXERCISES OF FALSE CONSTRUCTION. ADAPTED TO THE USE OF SCHOOLS, AND PRIVTATE TUTORS という、宣伝文句としての長い副題がついている。何しろ Murray は女学校の生徒の為に文法書を書き始めたので、彼女達が謗りを受けない規範を示す事には細心の注意を払ったであろう。だとすれば、禁止事項には特に敏感だったと考えられる。Knowles (1796) の禁則 (3a) は、Pickbourn の禁則 (3b) とその説明「a continued energy, or affection of the mind を表す動詞は進行形に出来ない」を纏め、極僅かに異なる言い方で簡約したものであることが如実である。

(3a) "Participial present, expressive of continued mental Affection, are not used after the Verb to be; as, *I fear*, not, *I am fearing*; *I love*, not, *I am loving*; *I know*, not *I am knowing* (Knowles: 1796: 59)."

(3b) We do not say, *I am loving, I am fearing, I am hating, I am approving, I am knowing*; but we say, *I love, I fear, I hate, I approve, I know* &c." (Pickbourn: 1789: 81-82).

Knowles の1785年の初版は、36頁足らずの、単に文法項目を並べただけのもので、当然ながら Pickbourn の影も形もない。それが1796年の第４版では144頁となり格段に充実している[2]。４版は、1793年にまず Liverpool で出され、それが *The Monthly Review XV* (1793: 350-351) で、"very compendious and complete and that it may even deserve to supersede those of Lowth and Priestley" と評されている。これとほぼ同一内容のものと目される新たな第４版が、1796年に London

[2] Alston に依れば、それは1788年にも出版されているが損傷しており、第２版と第３版は現存しない。

で２回も出版されたのは、それが影響しているかもしれない。Knowles の書に現れた大きい変化の一部は Pickbourn によるものと思われる。

書籍収集でも名の知れた読書家の Murray のことである。自らの文法書を改訂するにあたり、Knowles も Pickbourn もそれらの書評も全て視野に入っていた可能性は高い。だとすれば、彼の第５版に加えられた修正は、唐突に起こった事等ではなく、起こるべき時に起こるべくして起きたと言えるだろう。ただ、Murray の記述変化の根源を突き詰めれば Pickbourn の論考に行き当たるとしても、それが180度の方向転換へ繋がる理由は未だ判然とはしない。

３．Murray の文法著述の背景

たとえ Pickbourn の主張が如何に力に溢れ印象的であっても、それだけで、同一人物の同一構文に対する見解がわずか一年で豹変するということはないだろう。幼少期に無意識に身に付いた母国語の言語直観というものは、そうそう変わるものではない。直観自体が、そのような短期間で、いとも容易く真逆に翻るということはほぼあり得ない。Murray は第５版出版当時既に54歳、彼の言語環境が特に変わったということもない。その上進行形は、英語の二大基本構文の一つであり、当時から少なくとも口語では頻用されていたと考えられる。著者の母国語の言語感覚にそぐわないことを、文法として著すなどという様な事は、少なくとも現代ではあり得ないだろう。ここには、18世紀という時代が何かしら関係している様に思われる。そこで本節では、彼の著作の背景、即ち18世紀英国社会の特色、就中そこにおいて英文法が果たしていた役割やそのあり方に目を向け、疑問解決への更なる糸口を探る。

Beal は、近代後期は英国社会が大きく変容した時代だった、と次の様に述べる。

(4) “… the later modern period was a time of social change and social mobility in Britain. As the economy shifted from being land-based to money-based, and as

the Industrial Revolution proceeded, it became possible for a person born into a lower social class to rise to a higher position in society (Beal: 2004: 93)."

社会的地位の向上は可能とはなったものの、その実現には様々な知識と教養を身につけなければならず、中でも言葉使いというのは最も肝要であった。上流社会の教養の高い上品 (polite) な人々の言葉の使い方が正しいとされた。Lowth の短い前書きでも、polite という語で範とすべき使い方が形容されている。上昇志向の人々はそれを強く意識し、懸命に修得せんとした筈である。しかし、そうした polite な言葉遣いを身につけるのは一筋縄では行かない。生まれてこのかた、文法等を殊更に意識する事もなく、既に自然に培って来た言語パターンとは異なる、「正しいとされる英語」を、新たに意識的に学習し直さなければならない。ともかく「正しい英語を身につける為の縁」が必要であった。

そういった求めに応じたのが英文法書だった。その証拠に 18-19 世紀の英文法書の本文は、Greenwood (1711)、Lowth (1762)、Murray (1818)、Brown (1823)、Bullions (1834) 、Lennie (1866) を含め、その殆どが押し並べて English grammar is the art of speaking and writing the English language with propriety といった、文法の定義で始まっている。即ち、英文法書とは、英語を既に母国語として使っている人々が、英語の正しい話し方の術を身につける為に頼りとした、指南書だったことになる。そこには冠詞の使い方や、動詞で言えばその様々な形、例えば be 動詞や have や love の単純形が現在一人称単数形から複数形 3 人称まで、更にその過去完了形まで、それらと法助動詞の場合との組み合わせ等が一つ一つ並び、不規則動詞の過去形・過去分詞形等の表等等、初心者用基礎文法の並びにある事項が連なっている事である。それらは、現代では英語母国語話者であれば誰もが、既に子供の時から、全く意識もする事なく自然に使っている形と思われる事柄である。

Beal (2004: 94) は、当時の (特に中間層の) 人々は、自らの言葉の使い方に

正しくないとされる部分があるかもしれないという不安感を抱いていたと指摘する。Percy（2004: 153）は、当時の文法書は、様々なバリエーションがある言葉の使い方に正しい・正しくないというレッテルを貼り、それを品性の善し悪しと結びつけたと言う。Michael（1987: 328）は、学習者達が、他のどんな練習問題より、誤り是正問題を好んだと記している Rothwell（1797: 139）に触れているが、それは当然のことなのだ。事実、誤り是正問題は、多くの文法書の大きな割合を占める。当時の売れ筋の英文法書は、汎用性を謳う長い文句に加えて、前述の Knowles（1796）の様に、誤り是正をタイトルに銘打っているものも珍しくない。心もとなさを払拭する為に規範文法は希求されたようである。

Beal（2004: 93）に依れば、文法書の中には、世に知られた文豪や定評のある著述家達でさえ、文法書に頼らずには正しい文は書けない等と、読者の不安感を更に煽るものすらあったという。Percy（2004: 121）は、名高き Samuel Richardson が、書評に敏感で、版を新たにする度に、まるで強迫観念に囚われたかの様に過去分詞の形を替えたと言う。例えば、彼は write の過去分詞を、wrote から written に変えて行った。文筆家ですらそうであれば他の人々の不安はいかばかりであっただろう。

18世紀では、Write の過去分詞に wrote, writ, written などのバリエーションがある。Greenwood（1753: 161）にはこの 3 つが併記されている。同一人物の同一文書中で、wrote、writ の両方の表記が見られることもしばしばである。Tieken-Boon van Ostade（2011: 233）は、Lowth が、個人的な手紙には written と共に wrote も使っていたことを発見している。しかし Lowth は、自らの文法書（1762: 74）では、drive drove, driven と同じ部類として write, wrote, written を挙げ過去分詞の wrote を非難している[3]。Percy（2009: 134）は、Harris（1751）や Johnson（1755）が、過去分詞としての wrote を咎めていたと言う。written に収束した影には、文法書記述の影が見え隠れする。

同時代ではまた、単なる否定文と同じ意味の二重否定、more fairer といった二重比較級なども使われていた（cf. González-Díaz (2008), Bax, Randy Cliffort (2008)）。これらは、例えば強調表現として残ってもいいにも関わらず、消えて行った。その背景には、やはり文法書の記述が絡んでいるように見える。当時の文法書には、例えば Webster (1790: 55) 等の様に、I do not know nothing は I do know something と同義となるので I do not know anything というべき、即ち、二重否定は肯定になるから良くない等とするものが非常に多い。理屈に合うか合わないかが言葉の使い方を左右し、取捨選択がなされた面が多分にあるようだ。当時の文法書には、論理性優先で、余分な反復が排され、曖昧に同じ様なことを指すいくつかの表現形式から一つが選ばれるパターン思考が見て取れる。自然な言語というものは、踏み固められた典型性のものはあるにしても、限りないバリエーションに満ち、変容し続け、二項対立的な固定化したルールには、本来馴染まないものだろう。一方、その大部分を標本箱に閉じ込めることができる標準英語は、第二言語として修得するには手っ取り早く利便性が高い。論理的なものは受け入れやすい。現代標準英語というのは、意識的無意識的かは別として、論理的志向が働いた、極めて人為的制約の産物のように見える。

文法記述を頼みに、自らの言葉を矯正したい人々の為に、文法書は空前の繁栄を誇った。近代後期の英文法書新刊数は爆発的である。Alston (1974) のリストでは、17世紀迄は僅か15冊程だったのが、18世紀前半で31冊、後半で200冊以上、その内1790年代は68冊だ。19世紀については Görlach (1998) がリストを刊行しており、2000冊近い。Michael (1991: 11-26) の論文のタイトルにあるように、文法書が供給過剰とも言える時代であった。改訂版も次々と出され、

[3] 書評や文法形の論争の過程で write の過去分詞は written に収束したようだが、Lowth の言う通りにはならなかったものもある。Lowth (1762: 75) は、sit の過去分詞形が度々誤って使われていると懸念し、多くの文筆家が sitten を用いている例を20行も挙げ、正しいのは give, gave, given と同じ型に分類できる sitten だと保守的に主張している。

再版増版を繰り返しているものも驚く程多い。

その中でも、一際群を抜いているのは、やはり Lowth や Webster、そして Murray である。1762年初版の Lowth は、その後の38年間で42回再版されている。1801年以降については Görlach（1988: 361）が、1811年迄の間に12版以上があると付記している。Webster は1784年から最初は少しずつ改訂されつつ1822年迄の間に40回出版されている。Murray の *English Grammar* に至っては、版数が尋常ではない。Alston（1974: 93-96）の、出版国を英米だけに限ったリストには、1871年の65版迄が98行に亘ってぎっしりと列挙されている。同じ年にあまたの都市で出版されていることも目を見張る。それら多くの版が、世界各地の図書館に納められている。1875年出版66版の1907年77刷は、東京大震災の際に英国から寄贈され、東大図書館に所蔵されている。少なくとも７カ国語以上の翻訳版もある。Murray で英文法を学んだのは英語を母国語とする人々だけではなかったにしても、それは英米人が先ず拠り所とした規範が綴られていたからであるだろう。

自分が実際に使っている言葉に確固とした信頼感が持てないという点では、文法家もさしたる差はなかったかもしれない。少なくともそう考えれば、Murray の変更には一定の説明が付く。前年の刊で例文に使っていたものを新しい版で否定する等ということは、揺るぐ筈のない言語直観とは関係が薄いからこそ起きた事としか思えない。Webster でも、前述した様に1784年版では４頁に亘って繰り広げている、動詞 write と共に love を使い、単純形・進行形を対照させた詳しい説明も、不思議な事に1790年版では姿を消す。概ね同じ位置にある時制の説明は、現在形は I write や I am writing の様に、「an action now doing を表す（Webster: 1790:17）」という、僅か一行に縮小している。現在形、過去形、現在完了形、過去完了形等の単純形と進行形の説明自体は巻末補遺に移り、より充実しているが、love を使った進行形は不自然に削除されている。1787年版

では To be loving が残っているが、1790年版ではそれも消えている。規範例文としての適切性に関し、彼の中で揺らぎが生じた可能性がある。Webster が手本にした Lowth にしても、自身の実際の言葉の使い方と、規範としてあるべき文法は別物なのだ。それは Murray も同じことであったかもしれない。Pickbourn ですらも、I loved と I was loving 等の違いを尋ねられた際には、I was loving をその場で否定してはいない。誤りは、聞いて即座におかしいと正せる筈である。その時 I was loving は、彼にとっても明らかに容認不能な表現ではなかった可能性がある。標準化へ進む方向性が暗黙のうちに了解され、同じ意味を表す曖昧な二つの表現は何らかの形で区別されるべき時代に Pickbourn（1789）は書かれた。「I was loving とは言わない」という結論は、単純形の用法とは何か違う筈だという発想から始まる観察の副産物だったとすれば、Murray が納得してもおかしくない。

Lowth も Webster も Murray も上流階級の出身ではない。Tieken-boon van Ostade（2006: 551）は、中流階級の Lowth は、自分より上層の人々が使っていると認識した言葉の使い方を規範として記したと述べている。Webster の父は、聖職位にはあったが、基本的には農民で、教育を重んじたが大学は出ていない。上流階級の言葉が正しいとされ、その正しい言語を使う術が文法だった時代である。その権威である Lowth が捉えた正しい英語こそが、人々を導く指針と考えられたのは当然であるだろう。Webster の学識が如何に高くても、自らの言語直観は、文法を説くにあたり、こだわるべき対象ではなかった可能性もある。Webster（1784: 23-26）が、love を使った進行形を詳述しているのは、まずはやはり Lowth から学んだもの、それを削除したのは世の中で規範とされているものを重んじたからである様に思われる。

Murray の父は商人である。Murray は読書家で教養は十分でも、上流階級の言葉遣いだけに囲まれて育った訳ではないだろう。「正しい英語」の使い方を教

える規範文法は、やはり自らの固有の言語感覚を綴る筋のものではなかっただろう。彼の文法書には、彼自身の表現ですらない部分が多く、先行する書からそのままの完全な丸写しが随所にみられる。独自性が殆ど見られないことは、既に Murray（1797）に対する当時の書評（*The Critical Review* of October 1797: 227）でも酷評されている。前述した様に Alston も Murray（1795）の大半が、著者のオリジナルではないと言う。例えば、単純現在形に関する箇所の前 3 割は、初版でも 66 版でも Coote（1788: 88）のものと完全に同じである。残りも Pickbourn のものを例文もそのままに纏めただけである。彼の書の内容が、Pickbourn の記述を目にして変容しても、なんら不自然なところはないのだ。

しかし、彼の書が主に引用で成り立っているのは、やむを得ないところがある。彼は、友人の女学校における英語教育の為の、適切な教科書が存在しない現状の打開を図って著述に至った。彼自身は、動詞を探求した研究者でも専門家でもない。自分の豊富な蔵書や収集した知見の中から、女子生徒の為の文法書に盛り込むに相応しいと思ったものを吟味・厳選するのは、極自然な行為だっただろう。Coote の *Elements of English Grammar*（1788）は、*The Monthly Review*（May, 1791: 315-319）では酷評されているが、Coote の単純現在形の説明を Murray が取り入れているのは、それが解りやすく Murray の眼鏡にかなったからではないかと思われる。Murray は、様々な先行文献の断片的な所見を、文法項目毎に整理し、目次を付け、できる限り系統立てて並べることに専念している様に見える。Lowth, Webster, Brittain, Coote, Pickbourn, Knowles 等には目次はない。単純現在形に関しても、最も典型的な用法だけを挙げた Coote に Pickbourn を付け加えた方が、より網羅的で充実した説明となる。Murray の剽窃を批判した前述の *The Critical Review* も、次の行では「当該書は文法規則を包括的に簡潔かつ明瞭にしようという目的に叶ったものである」として、彼の努力を認めている。それは、多くの人々にとって待望の書だっただろう。だからこそ、Murray

の *English Grammar* は一世を風靡したに違いない。

正しい英語の体系化が最も重要な使命であれば、その達成の為、当時の権威とされている Lowth と他をうまく組み合わせることが肝要であって、私見は関わりのないことであってもおかしくない。先ずは Lowth の見解に従うのは、当然のことであっただろう。知見を拡げるうちに Pickbourn の専門書や Knowles の書の評判が眼中に入ってくれば、その内容を無視することもできない。時代の要請に俊敏に応える為には、抜本的推敲の暇もなく、love を teach に取り替え、ともかく Pickbourn の見解を取り入れることが優先されただろう。規範を示すことが求められる状況では、彼自身の I am loving に対する判断など顧みる道理はなかったかもしれない。だからこそ、柔軟に対応し、前版の記述と矛盾する内容を新しい版にいとも簡単に盛り込むことができたのであろう。英語という言語が、18世紀当時の英国社会と同じく流動的であったことは間違いないだろう。そうなると、Murray の書き直しには取り立てて不自然なところはなく、今考える程には奇妙ではないのかもしれない。

４．進行形の本質

本節では、Murray が第４版迄進行形の例文に I am loving を用いた理由を探る。18世紀の進行形の実際の事例を観察すると、「表す事態に変化が認識されるかどうか」という aspectual な区別は、今意識される程には進行形の使用を左右していなかった様に見える。進行形にはもっと本質的な意味機能があって、それを見極めれば、Murray 第５版以前と以降の記述の両方に説明が付くように思われる。

Pickbourn が禁じても、近代後期の英文法書では、I am loving は進行形の筆頭或は唯一の例文として用いられ続ける。前述の Lowth (1762: 56)、Webster (1784: 25)、Murray (1795: 61, 1796: 72-73, 1797: 84) のみならず、Story (1783:

25-1793: 26)、Harrison (1784: 47, 1794: 53, 1800: 31)、Postlethwaite (1795: 99)、Burr (1797: 99)、Fenning (1800: 54)、Lennie (1810:39)、Bullions (1834: 38)、Farnum (1842: 42)、Swett (1844: 58)、Weld (1849: 100)、Fowler (1851: 39)、Thring (1851: 35) など、枚挙のいとまもない[4]。Vickroy (1868: 52)、Ussher (1785: 41) や Webster (1787, the 3rd ed.: 52) には To be loving が、Priestley (1798: 23)、Whitney (1886: 220) には *I am hearing* や *He was seeming happy* 等が現れる。1900年の Henry Sweet (1900: 105) ですら *I am seeing* を現在進行形の唯一の例として使っている。いずれも名だたる文法書であり、繰り返し新版が出されている。この中には Lowth に従っただけのものもあるのかもしれない。それでも、彼らにとって I am loving は充分文法的だった筈である。

他方で、Pickbourn (1789)・Knowles (1796)・Murray (1799) 以降、I am loving タイプを明確に禁止するものがある。例えば (5a-c) に挙げる Butler (1879, 1845初版)、Kerl (1868)、Reed and Kellog (1880: 216, 初版は1877? と Görlach (1998: 285) が記している) 等である。

(5a) Butler: "some verbs, especially such as those that denote affections or operations of the mind, in their simple forms express actions that can not be performed without being completely performed or actions that are in their nature continuous, and such verbs can not take the progressive form. "I am loving," for instance, is not good English (1879: 91)."

(5b) Kerl: "*love* cannot be used in the progressive form (1868: 24)."

(5c) Reed and Kellog: "the progressive form denotes a continuance of the action or being; as, The birds *are singing*. Verbs that in their simple form denote

[4] I am loving について、Wischer (2003) は、実際には使用されなかっただろうと言うが、少なくとも文法書では使用され、容認できない例ではなかった筈である。現代でも使われていることは無視すべきでない事実だろう。

continuance — such as *love, respect, know* — should not be conjugated in the progressive form. We say I *love* the child — not, I *am loving* the child (1880: 216)."

別の動詞を使うものにも、Pickbourn の影が感じられる。Brown (1823: 69) も respect の様な「継続を含意する動詞」は進行形にできないとする。Angus (1839: 150) は、Scotticisms, Vulgar Anglicisms という項目で、"the clock is standing," and 'He is not at home, I'm thinking" を誤用とし、Bain (1872: 115、初版は 1863 年) も 'the master is calling you,' 'he is speaking to you,' 'were you ringing?' 'I was supposing' 'he is not intending,' は the best English usage に違反する Scotticisms であって、正しくは 'the master calls,' 'he speaks to you,' 'did you ring?' 'I supposed,' 'he does not intend.' と言わなければならないとする等、hypercorrection の様相すら帯びている。

即ち、19世紀では、I am loving 及びその類いを、進行形の正当な例とする文法書と、慎むべき誤りとするものが存在する。発刊数でまさり声がより大きかった方が標準英語に織り込まれたのではないかとすら思える。例えば、前述の Brown には 3 つの著作があるが、それぞれ20回、29回、24回再版されている (c.f. Görlach: 1988: 61-64)。Kerl は10年足らずの間に 9 冊の文法書を出し、それも何度も増版を重ねている。(c.f. Görlach: 1988: 200-202) 20回以上改訂された Reed and Kellog を評して Görlach (1988: 61-64) は、改訂版数から、この書の人気の高さが解ると言っている。中には自然な英語の多様性を反映する場合もあるのかもしれない。しかし、それでは、Murray の場合を説明することはできない。

興味深いのは、相反している筈の Lowth と Pickbourn の解説には共通点があることだ。両者はいずれも、単純 (現在) 形は「indefinite に続く事実を述べる際に使われる」のに対し、現在進行形は「動作やその事実を現在に限定 (confine)

する際の（即ち definite な）表現」だとする。進行形の特性解説に同じ confine という動詞を使った説明は、Bain (1872: 114) にも他の多くの書にも見られる。I am loving に関し、Pickbourn は Lowth を非難するが、「進行形は常に definite (26頁)」という説明自体は一致している。これは一体どういうことなのだろうか。

ここで注目したいのが、Webster (1784) である。彼はその23頁で英語に特有で重要な形式として、単純形（the indefinite）と進行形（the definite）の相違認識を喚起し、24頁で (6a) の様に説明している。

(6a) The indefinite tenses represent an action as present, past or future, in a vague indeterminate manner; the definite, ascertain some particular time or circumstances of action.

その上で、後者を be 動詞と現在分詞 ing 形で成り立つ形として導入し、動詞 write を使った両形式に加えて、I am loving, I was loving, I have been loving, I had been loving, I shall be loving と、それぞれの単純形との比較解説を詳しく展開している。 単純現在形については (6b) の如くである。

(6b) "do not denote any particular exercise of body or mind now performing or existing---they convey general and vague ideas. Indeed in many instances there is very little reference to time or action; for, *he writes a good hand*, is often used to signify merely skill in writing (1784: 24)."

その上で、I am loving は "I am now in the actual exercise of the passion of love (1784: 24)" を表すと述べる。即ち、現在進行形は、「今この時の個別の状況」を描く。また、単純過去形が、ある過去時にこだわった言い方ではないのに対し、過去進行形は、ある状況が生起していた、「他ならぬまさにその時」を指し示す表現としている。I was Loving はある過去時その時点での心情表現と捉えられていたと考えられる。

Webster が、形式名称として Lowth と同じ語を使っていることは、Lowth を

手本としたことを示唆しているだろう。しかし、それは単に Lowth の権威に従っただけでなく、我が意を得たりと感じられるものがあったからに違いない。Lowth の、動詞 love を使ったこの二形式への観察言及は、約36文字11行で終わるのに対し、Webster のものは、約54文字88行と格段に充実している。Lowth のものは、indefinite, definite が同時に二形式の呼称でもあり特性記述そのものでもあり、残りは3時制の例が並ぶだけである。Webster は、それを詳しく敷衍している。具体性と解りやすさに粉骨砕身した姿が彷彿とする。そこには、共感と実感なくして記されることはないであろう Webster 自身の言語感覚が光っている様に感じられる。1790年版でも、love を使った進行形は削除されているものの、二形式の相違説明自体は堅持した形で、Webster は I am loving の類いを禁じてはいない[5]。

この Webster の言及は、18世紀の進行形の使われ方と、十分整合する。コーパスを使った調査等では一般には、18世紀の文献における進行形の頻度はかなり低いとされている。だが、手紙や小説の会話部分など、話し言葉を反映していると考えられるものには極めて繁く現れる。例えば、*The Clift Family Correspondence 1792-1846* には、ほぼ現代と同じ頻度で、ほぼ同じように使われている。異なるのは、現代標準英語では容認不可とされる、境界や変化が意識されない事態を表す動詞が使われている進行形、即ち I am loving の類いが散見されることだ。これらは頻出する訳ではないが、サンプル的に抽出した資料にも比較的容易に確認できるので、例外として無視すべきものでもないように思われる。頻度が低いことすらも、Webster の洞察と全く矛盾しない。

(7a) は、18世紀半ばのイギリス小説萌芽期の、Henry Fielding の *Amelia* から

---

[5] love を使った進行形は、Webster (1787) で既に To be loving だけになっている。Pickbourn は、自著が出版される前に、Webster に影響を及ぼし得る何らかの形で、持論を世に放っていたのかもしれない。或は Pickbourn より先に、既に他の人物が制限を打ち出していたのかもしれない。

の一例で、主人公の台詞である。

（7a） ‘Fie upon it,’ cries Amelia. ‘I hope there are no such people. Indeed, my Dear, this is being a little too censorious.’（1752, Henry Fielding: *Amelia*, Book VIII, Vol. III. p. 98.）

嫌悪感を表す滑稽味を帯びた間投詞 Fie で始まるこの Amelia の発言は、会話の相手が言及した状況に対し、「これってちょっと酷すぎるわね。」と牽制している。進行形はその時点の Amelia の感想、即ち状態を表している。現代標準英語であれば、単純現在形が用いられるところだろう。

この小説には会話だけでなく、地の文にも進行形がよく使われている。例えば（7b）の様な、現代でも進行形が使われるところに出現する。

（7b） In this Situation, Mrs. Atkinson was doing her utmost to support her, when a most violent Knocking was heard at the Door, …（1752, Henry Fielding: *Amelia*, Book VIII, Vol. III. p. 101.）

この過去進行形は、when 節の突発的出来事の起きたその時の背景情報を表している。過去進行形に関し、Webster（1784: 24）は I was loving と I was writing を例に取り、次の様に述べている。

（8） We use this tense to point out the precise period when an action was performing, and it commonly has reference to some other event mentioned as taking place at the same time; as, “*I was writing*, when you came in.”

これは、中英語期や現代でも、過去進行形の極典型的な使われ方である。17世紀や19世紀の文法書、Miege（1688: 70）や Cobbett（1818: 135）にも同じ様な例と共に同趣旨の説明がある。

進行形は、特に親しい人々への手紙などにも頻出する。前述の *The Clift Family Correspondence 1792-1846* にも、（9a-c）の様な、状態を表す動詞の進行形が見受けられる。

(9a) There is great alternations in Bodmin since you left it. There hath been more/more buildings since you **have been wanting** than ever I remember before.

(1794, *The Clift Family Correspondence*, p.83)

(9a) は、読み手に関する記憶の場面場面での相手の気持ちを表現していると思われる。(9a) の様な進行形は、実際には現代でも、口語では使われている。学究的な文面では使うべきでないものとされているだけだ。Webster (1784: 25) は、この形についても勿論 I have been loving の例を挙げながら「時点時点で二つの出来事が比較され、いずれの場合も、限りなく限定的 (definite) な状況について語る場合に使う」と説明している。それは、愛する心情が一過性で終わることが意識されているという意味ではなく、あくまで、観察したある時点での状況について述べていると考えられる。(9a) に照らし合わせると、当時の実際の使われ方をよく観察したもののように思われる。

(9b) の was wanting も、気持ちの終わりが認識されているとは思えないという意味では、wanted と同じだ。

(9b) Mr. Hewer was wanting you out of the House.

(1795, *The Clift Family Correspondence* p.104)

Hewer さんが書き手の目に入った時の Hewer さんの要望である。単にそれ以外の時点での状況にはコミットしない言い方と見るべきだろう。wanted を使うと、相対的により継続的な状況と受けとめていることを表現することになるかもしれない。was wanting もまた、現代でも口語では使われることがある。現代標準英語は、Webster の感覚で捉えられていた、状態動詞の進行形のこのような微妙な区別を失ってしまったのかもしれない。

次の (9c) の現在進行形の例も、書き手の現在時の観察を表している。この場合、現代標準英語では、seems to be となるだろう。しかし進行形を使ったこの例では、判断の対象が書き手のその時の状況により限定されているように感じ

られる。

(9c) …, the trade is seeming to be going on a great deal better than it has of late …. (1794, *The Clift Family Correspondence*, p.92)

これと Whitney (1886: 220) に出てくる He was seeming happy の例を重ね合わせると、誤用とは思えない。であれば I am loving も、発話時の状態を表していたと考え得る。

(9a-c) の様な進行形が使われているのは、The Clift Family が貴族ではないからという訳ではない。この家族は当時としては教養も高かった人々だと思われる。実際に貴族の一員で教養も高く文筆家でもあった Lady Mary Wortley Montagu の手紙の中に (10a) の様な例があるのを、Smith (2004) が発見している。

(10a) Poor Lady Fanny is very ill; I am sorry for it, though I (almost) envy her happiness in domestic Life, where only true happiness is existing.

(Catherine Smith: 2004: 178)

また、exist の進行形については、John Keats の手紙にも見られることが Denison (1998) でも、指摘されている。

(10b) Do not live as if I was not existing – Do not forget me.

(1820, Keats, *Letters*, from Denison 1998: 146)

これら (10a)、(10b) の場合も、現代標準英語では、基本的には単純形にならざるを得ないだろう。その手紙を書いているその時点の状況認識命題の叙述であり、所謂状態を表している。しかし (10a) の進行形は「本当の幸せというのは家庭生活にしかないのではないかしらと思う気持ちが今心をよぎった」こと、(10b) も「自分がまるで存在しないかの様な状態」が「あって欲しくはない状況として今一瞬脳裏に浮かんだ」という感覚を表現していると解釈可能だ。例えば (10a) の進行形を単純形にしてしまうと、「本当の幸せは家庭生活にしかない」という命題の真に関する揺るぎなき見解としての断定的主張との区別はな

くなる。Keats の場合も直ちに掻き消したい妄想の表現として単純形にならなかったのではないだろうか。「ある一時点の状況の話をしている」というのは、これらに限ったことではなく、現代でも全ての進行形について言える特性である。

（10c）は、John Dryden の弟子、Dublin の Trinity College で教育を受けた若き William Congreve の恋人への手紙の始まりにある。

（10c）Your letter came in just as I was intending to write to you.

（1709, *William Congreve Letters and Documents*, p. 34）

この進行形も、現代標準英語にはあまりない言い方だろう。しかし、I intended という単純形では、ある程度時間的に広がりがある意志に関わり、just と合わない。（10c）の進行形部分を、現代標準英語で強いて言えば、just as I thought of writing to you や I was going to write you や等が最も近いだろう。しかし、それでは、「思い浮かんだ」あるいは「書こうと準備していた」ということになり、「書こうという気持ちでいっぱいだった」まさにその時というニュアンスに特化したものではなくなるように思われる。やはり、現代標準英語の進行形にかかる制限は、こういった表現を犠牲にしてしまったのかもしれない。

（10a-c）の様な例だけをみると、進行形が、ある特別な思い入れがある場合や、感極まった場合に使われている様にも見えるかもしれない。そういった面に着目してか、近代迄、或はそれ以前の進行形全般が emphatic に使われていたとする研究（Killie: 2014）や、状態動詞が使われる進行形を特別に Expressive progressive と呼んだり、emotional attitude を表す場合に、進行形に状態動詞も使われると見たりする研究もある（Cf. Hubler: 1998）。Expressive という概念が何を意味するかにもよるが、（9a-c）等のように、特に emphatic とは思えないものも多い。但し、ある時点での事態を切り取って捉える形は、より時間的に広がりのあるものとして捉える事態より、その時点に意識を集中する分だけ、相対的に事態に鮮明さを感じる傾向はあるかもしれない。それは、進行形が動き

や変化を表す際に使われる傾向が極めて高いということとも繋がる。しかし本稿では、それはあくまで進行形の本質的な意味機能に副次的に伴う傾向であると考える。

18世紀の実例を眺める限り、二形式の違いは、Webster の解説通り、叙述の対象範囲の問題であって、事象を時間的により広がりのある視野で捉えるか、相対的に絞った時点範囲でみるかというところにあり、事象に変化や動きを捉えるか否かではなかった可能性が感じられる。現代でも He was drinking は、drink という行為の全体を捉える He drank に対し、(行為の途中の) ある一時点の状況に焦点を絞った表現である。I am loving も発話時現在の心情を表していたのではないかと考えることが出来る。そうであれば、Murray が第１版から第４版まで進行形の例文として用いたのも、自然なことであった様に思えてくる。

一方で Pickbourn が、「進行形は 常に definite (26頁)」という点では Lowth と一致しているにも関わらず、Lowth の I am loving を非難し禁じたのは、definite といった曖昧な文言に満足できず、単純形と進行形の相違を際立たせる決定力に欠けると感じたからではないかという可能性がある。

Pickbourn は、そこに「現在進行形は、動詞の意義を現在の一瞬や今に限定 (confine) する (26頁)」と続けた後、①「(現在進行形は) 既に始まっていて、現在継続しており、まだ完結していない事柄を表す」と続けている。ところが、それは現在進行形だけの特色ではない。状態であれ動作であれ、物事にはすべからく始まりと終わりがある。He is a student 等の状態や He walks to work などの習慣も、既に始まっていて、発話時現在継続しており、まだ完結していない事柄である。

また Pickbourn は、次頁で②「a continued energy or an affection of mind を表す動詞は進行形にならないので I am loving とは言わない (27頁)」、と加えているが、状態だけでなく動作も、基本的には時間の (経過) 広がりに伴って認識

されるものである。例えば He walked home の walk は、過去繰り返して起きた場合も、一回の動作の場合も、continued energy によって生起している。時間的経過を伴うからこそ、その途中の視点から事態認識ができ、He was walking home と言える。現代でも、文法書によっては進行形を continuous tense と呼ぶのものある。継続的とはいえない punctual な事態も、繰り返し起き、ある程度継続的でなければ進行形にならない。Fowler（1851: 249）や Lennie（1866: 39）は、進行形は action または state の継続を表すとして、He was loving や I am loving 等を例示している。従って、①②だけでは、単純形にはない進行形だけの特色を記述する決め手になっていない。

他にも、Pickbourn は、単純現在形が表すこととして挙げている habits も、その叙述対象を最近に絞れば I am walking to school these days 等の様に現在進行形で表現する。限定的というのも曖昧な表現である。実際のところ、単純形で、It's 3 o'clock 等の様に現在の一瞬を捉える場合もあれば、進行形にも He was watching TV all day 等の様に時間的に広がっている場合もある。It's being 3 o'clock が奇妙なのは、もともと短時間である表現対象をより絞るのが奇妙だからと言えるかもしれない。He watched TV all day yesterday は、watch TV という事態全体を事象の外から表現しているのに対し、He was watching TV all day は、事態を内側から見ている、となるだろう。思い返すと彼が目に入ったときはいつも TV を見ている途中だったというニュアンスであり、やはりある認知対象を時点時点に絞っている。これらの二形式の相違は、本質的に相対的なものなのではないだろうか。

Pickbourn には相対的な表現では不十分だったのは、彼の所期の目的が違いを明確にすることにあったからかも知れない。その為には二形式の守備範囲を排他的二項対立にするのが最も望ましい。Pickbourn は単純形を、物事の一般性、普遍の真理や習慣的行為等の継続的な事柄を表すものとしたので、進行形

は、相補的なものにする必要があっただろう。規範として、I am loving を犠牲にし、love は進行形には使えないと明示した方が、二形式の対照が明確になる。

Pickbourn が I am loving を犠牲にできた、或はそうは言わないと言い切って制限を導入したのは、その類いの進行形が使われることが、特に書き言葉では少なかったからかもしれない。それは、叙述対象を見る時間的範囲を絞るという進行形の本質的な機能と深く関わっていると考えられる。ある時点その時々の情報というのは、事態が変化している時の方が、変化しない時より、興味の対象となりやすいだろう。であれば、進行形は変化する事態と相対的により結びつきやすいことになる。

また、変化を伴う（動き）か伴わない（状態）かという aspect 概念と、現在時制、単純形／進行形の特性を整理すると、進行形と動作の密な関係が見えてくる。状態というのは不可算名詞と同じ様に homogeneous で、一瞬かより継続的なスパンかに関わらず事象の全体像を捉えることができる。一方動きや変化は、時間の経過において heterogeneous な局面が認識されるものなので動詞の表す全体像は一瞬では捉えることができず、捉えうるのはその一局面だけである。また、現在時制というのは現在という発話時一瞬における事象を捉える。単純形は事態の全体像を表す形であり、進行形は叙述対象範囲を限りその一部を表現する形だとする。そうすると、まず、状態は、叙述対象範囲が広くても限っても、単純形で表わすことができる。その意味で、状態を表す進行形は、必要不可欠ではないという点で、出番は少ない。通常、文脈、特に陳述する現象に関する常識や時の副詞等などを補うので、対象範囲に関する理解に支障はきたさない。一方、単純現在形では、（一瞬では捉えることができないので）動作を表すことはできない。現在の動作というのは、その一部を発話時現在で捉え得る現在進行形でしか表すことができない。そのような原理が働くため、尚一層現在進行形は動作と結びつきやすい。原理的には進行形が必ずしも変化を

伴う必要はなくても、状態を表す進行形が稀であってもおかしくはない。

非典型的あるいは頻度の低い現象は、対照が明確で解りやすい規範を定める為に捨象されたのではないだろうか。二つの形式の違いが相対的なものである場合、実際の現象は、語の意味、様々なレベルの文脈によって複合的に取捨選択されるので複雑である。万人、特に、自分の言葉遣いに不安を持ち文法書に頼ろうとする人々を助ける規範を示すには、やはり、単純化した二者択一的なルールの方が受け入れやすく力強い。Aspect によって分けてしまうと、本当は様々な例外が生じるが、大勢には大きな支障はないのだ。規範文法を書いている Murray が、ルールを取り入れる意義を認めても、何の不思議もない。

しかしながら、実のところは、二形式の相違は Webster に示されているような相対的なものであったのではないだろうか。彼の説明は、18世紀の進行形だけにではなく、現代のものにも当てはまる。Jane wears red glasses では通常、Jane が普段から赤い眼鏡をかけているという認識が表現されている。それに対し Jane is wearing red glasses は、今眼前にある事態認知について話をしている（Cf. Mittwoch: 228-234）。現代標準英語の進行形と異なるのは、Webster（1784）の時代、進行形を変化が認識されないものに使用するのは正しくない、等という規範が存在しなかっただけではないだろうか。

もっと踏み込めば、自然に発される英語の進行形には、現代でも本当のところは、aspectual な制限はないのではないか、という感さえしてくる。現代でも、実際には love, like, hate, weigh, want, intend, know 等の動詞は思いの外多く進行形に使われている。Kakietek（1997）は、これらを含めた実に多くの状態動詞の使用例を全編にわたって並べ、進行形に使えない動詞は事実上存在せず、aspect 識別は進行形とは無関係だと論じている。

次の様に、意味的には単純形と互換可能と思えるものもある。

（11a）“Can you play that tune, Colin?” Mrs. Wolfingham asked. “I wouldn’t **be**

knowing that tune, Mrs. Wolfingham," the young piper answered.
(*Hunting the Fairies*, Compton Mackenzie, 1949: 180 from Hirtle and Bégin: 1991: 124).

(11b) "Where's Robert?" he asked. "I **ain't a-knowing**." Her lips were puffed out, her voice sullen. "He ain't never tell me where he goes." "When did he go?" "This e'ening. Right after you went off. Didn't he come to the schoolhouse?
(*Walking on Borrowed Land,* 1953, p.257, William **A**. Owens (1905-1990))

(11c) These dishes are resembling.　　(大使館の食卓、BS フジ)

(11a)、(11b) には、それぞれスコットランドや米南部の方言の響きがある。(11c) は、アイルランド大使館給仕長が目の前にある料理の説明をしている際に現れた。

Smith (1981: 370) は、stative progressive は、標準英語では禁じられているが、次の様に、stative situation について語る際にも進行形は多く用いられると言う。

(12) I'm actually liking this play.

彼女は、(12) は、informal context で生じ、動的様相を帯びていると述べるが、そこには、標準英語の規範の影響が色濃く感じられる。一方で、これらは、Webster (1784: 24) でも十分説明可能だ。(12a) は「案外これって好きかも」と今その時心にのぼった感触を表現している。これらは勿論、変化の過程における一場面の表現と捉えることもできるが、必ずしもその前後に変化がなければならない必然性は感じられない。

「標準英語は stative progressive を容認しない」という意識はどこから来るのだろう。Hornby (1976: 105-107) は、see の様な、知覚・感情・認識等、自分の意志で終わらすことができない状態を表す (non-conclusive) 動詞について、単に進行形になる頻度が低いという言い方をしており、禁じてはいない[6]。

informal な状況で使われるといった言及もない。彼は（13）、（14）を含めた、同じ動詞で、進行形が使える場合と使えない場合がある例を多数挙げ、例えば、（13a）の様な、固定化している好みについては使えないが、（13b）は、好きか嫌いかが定まっていないかもしれない場合には使えると言う。（14a）は非文だが、（14b）の様な進行形は「その人物が、しょっちゅう何度も要求をつきつけてばかりいる」ということを示す、等と相違を説明する。

（13a）*Are you liking fish?

（13b）How are you liking your new job?

（14a）*Tom is wanting to be a doctor.

（14b）What's he wanting this time?

ここにも変化のニュアンスが介在してはいるが、単純現在形は「今に限らない事態」について、現在進行形は「今のところ、今回」即ち「今」についての話をする時に使うという説明も成り立つ。（13b）や（14b）は、その様な状況では、母国語話者自身の自然な感覚で普通に使えるということであり、口語的で頻度も低いかもしれないが、非文法的等ということはない。

筆者自身も、例えば（15a）や（15b）等は実際頻繁に耳にする。

（15a）Now, we are seeing the building.

（15b）You'll be needing it.

---

[6] 大江（1982）も、状態動詞は進行形になりにくい動詞というべきであるとし、32頁で、単に不完結な状態を表す「愛している」や「知っている」という意味での *I am loving her. や *They are knowing her name. を誤りとしながらも、76-103頁で、(i-iv) の様な、状態動詞が使われている進行形の例を、小説等から多数挙げている。

(i) I was intending to omit that tonight. (*A Lost Lady,* 1923, Willa Cather (1873-1947))

(ii) The French doll she was loving wore an exquisite powdered wig.
(*Miriam*, 1953, Truman Capote (1924-1984))

(iii) In a moment, if I stay, I'll be wanting to kiss you.
(*The Teacher*, Sherwood Anderson (1876-1941))

(iv) More than that, she was believing things he had not told her.
(*East of Eden*, John Steinbeck, 1902-1968)

(15a) の話者は、高速を運転しながら、「今見えているのがその建物よ」と言っている。これも変化している状況で捉えられた知覚とも言えるが、その瞬間その場で見えた瞬く間に通り過ぎてしまう光景とも言える。(15b) は、You'll need it と言ってもいいが、それでは、確実に起きるだろうという推測を主張するのに対し、「それが必要な場面に遭遇することもあるんじゃないか」と口語的で柔らかく暖かい言い方になる。進行形は、確かに変化を伴う場合が多く、(15a, b) の類いの頻度は低いかもしれない。しかしそれは相対的には、という話である。進行形は同時に、英語の二大基礎構文の一つである。本当に稀なのかどうかは疑問となるところである。

次の例 (16) について、Osselton (1980: 454) は、微妙に変化のニュアンスを表現していると言う。

(16) He had to remember that this man, helpless, an object on the operating table, he **was knowing** the meaning of loneliness: ultimate loneliness, not too far from the loneliness of dying. (Snow, C.P. *In Their Wisdom* (1977) Penguin, p. 317, bold is mine)

しかし、それは現代人が標準英語の規範に規制をされて、進行形に何らかの変化を読み込むからなのかもしれない。彼は、ここで単純過去形 knew を使うと、いつとははっきりしない過去の時点から継続して孤独の意味を知っていたという意味になる、と言う。それは、まさにこの形式が、indefinite past を表すとする Webster の感覚である。実際に小説を読んでみると、(16) は、手術をする側が、される側の心情に思いを致す、その場その時の知覚認識を描写する為に、英語に可能な表現形式の中から最も適切なものとして、C. P. Snow が選択した表現とも感じられる。必ずしも動きや変化が伴わない意味でも十分捉え得る。Hirtle & Bégin (1991) は、Osselton に賛同し、数多くの例を考察しながら、進行形は状態動詞が使われていても微妙な activity を表していると結論づける。だが、

それも、現代標準英語の規範が染み込んだ現代人の感覚である可能性もある。

Pickbourn が禁じる I am loving 自体も、今日よく目にする。特に、規範に縛られない、自然な英語には現れる。コーパスに現れないのが不思議なくらいだ。

(17a) I'm lovin' it.

(17b) She's loving every minute of it.

(17c) I'm still loving all of it.

(17a) では、ハンバーガーをほうばる動きが目に浮かぶ。しかし、それは「大好き」という、その場での気持ちを表現しているからと言ってもいい。(17b) も、どの時点においても経験するもの全てが楽しい様子を表現している。それは、(17c) も同じで、動きや変化等に絡む必要はなく、Webster の言うように、今の actual な心情の表出だ。単純形が、時間の広がりにおいて成立していることを意識した表現であるのに対し、進行形は、現況に焦点を当てる。その場でその時に実際に生じている現象の話であれば、それが話し言葉に多いのは、当然であるだろう。

これら実際に見聞きする現代の使用を観察していると、規範文法がいくら律しても、人々が自然に口にする素顔の英語では、I am loving やその類いの進行形は、実のところは連綿と使われ続けてきたのではないかと思える。I am loving は、まさにその時の気持ちを表す進行形の例文として十分相応しい。進行形の制限規則は、互いに築き上げようとして来た、現代標準英語での約束事と捉えるべきなのかもしれない。

I am loving を含め love を使った例だけを23例挙げ、事態の継続を表す形として進行形を説明する Caleb Farnum (1842: 40-41) は、註のところで、進行形に love が使われるのは稀だが、動詞の全ての形を表示するには、同じ動詞を使うのが良いようだと記している。稀と言っても非文法的ではなかった筈で、その上例文として好都合であった故に、19世紀の文法書でも使われ続けたと考えら

れる。Lowth を含め、文法書の多くには、have, be, love を使った動詞の様々な形を並べるパターンが存在する。従って、それに倣って Murray が第 4 版迄、love を使った例で進行形を説明しても不自然なことはない。しかし同時に、進行形は、英語の二大基盤構文であり、売れ行き上々だった自らの文法書の社会的責任と有識者の時流に乗った見解とを鑑みるに、版を改める際に、進行形の制限が規範として加えるに相応しいものと判断したのもやはり自然であっただろう。

Murray も、affections of mind には合わないとしながらも、I am loving 自体を例に挙げて非難するには至っていない。逆に、自分にとってもおかしくないし、実際に使われているからこそ、規範としての制限を、Murray が自らの著に盛り込む必然性があったということは十分考え得る。

5．終わりに

以上、本稿では、Murray の進行形の制限に関する扱いが、突然不自然に大転換した理由を探ってきた。そして、それは単に今日的な目にそう見えるのであって、当時彼を取り巻いていた状況を考えると、全く起きてもおかしくない時期に、起きるべくして起き、微調整であった可能性が高いことを論じてきた。そこには、言語のあり方がまだ揺れ動いていた近代後期の英文法書の役割、彼の目に留まったであろう、鮮烈な進行形の制限の力強さや、進行形の本質的な特性が関与していると考える。

規範文法によって、I am loving やその類いが、標準英語では正しくない、書き言葉では慎むべき、という意識が浸透しても、本来の進行形の一面は、時折顔を出すようだ。特に打ち解けた間柄での気楽な話し言葉では、箍からはずれて解き放たれるようだ。しかし、進行形を、その時その場での状況に焦点を合わせる構文として見ると、近代後期から現代までの使われ方を包括的に説明で

きる。

進行形は、他のゲルマン系言語では必要のない英語特有の構文で元々は単純形の口語版であったと考えられている。大枠では単純形と同じ様なことを表す表現として存在したが、基本的に口語で使われ続けたので、18世紀の Lowth から見ると、現在進行形は、会話の参加者の「今、ここ」という時間的に限定された状況を表現するといった形で、単純形と役割分担を始めていたと考え得るだろう。Mittendorf and Poppe（2000）は、Welsh の VN（Verbal Noun）構文と、現代標準英語の進行形との類似性を観察しているが、VN 構文には aspect 制限がないという大きな違いが障壁となりそれ以上の議論を躊躇っている。だが、制限が人為的に生じたものであれば、VN 構文から進行形までの流れは見通しがよくなり、新展開が期待できる。Murray の記述の変化は、そういった見解を支持するものと見ることもできる。

Reference

Primary Sources

Alexander, Caleb（1792）*A Grammatical System of the English Language: Comprehending a Plain and Familiar Scheme, of Teaching Young Gentlemen and Ladies the Art of Speaking and Writing Correctly Their Native Tongue*, Boston: Samuel Hall.

Bain, Alexander（1863）*An English Grammar*, London: Longmans Green & Co.

Barrett, Solomon 1837 *The Principles of Language: Containing a Full Grammatical Analysis of …*, Albany: O. Steele.

Brittain, Lewis（1788）*Rudiments of English Grammar,* Louvain: L. J. Urban.

Brown, Goold（1823）*The Institutes of English Grammar*, Scholars' Facsimiles and Reprints（1982）, New York: Delmar.

Buchanan, James (1762) *The British Grammar*; rpt. Menston: Scolar Press (1968).

Bullions, Peter (1834) *The Principles of English Grammar: Comprising the Substance of the most approved English Grammar Extant, with Copious Exercises in Parsing and Syntax: and an Appendix of Various and Useful Matter: for the Use of Academies and Common Schools*, New York: Clement and Packard.

Butler, Noble (1879) *A Practical Grammar of the English Language*, (American School Series), Louisville: John P. Morton and Company (First Published in 1845 Louisville: Morton & Griswold).

Burr, Jonathan (1797) *A Compendium of English Grammar, for the Use of Schools and Private Instructors*, Boston: Samuel Hall.

Cobbett, William (1818) *A Grammar of the English Language*, New York: Printed for the Author, Sold by Clayton and England.

Coote, Charles (1788) *Elements of the Grammar of the English Language*, London: Printed for the Author, Sold bu C. Dilly.

Devis, Ellin (1795) *The Accidence; or First Rudiments of English Grammar*, (The 8th edition), London: C. Law.

Farnum, Caleb (1842) *Practical Grammar, A Grammar of the English Language*, Providence: B. Cranston and Co.

Fenning, Daniel (1800) *A New Grammar of the English Language, an Easy Introduction the Art of Speaking and Writing English*, …, Printed by J. S. Hollis Romseey, For the Booksellers.

Fisher, Ann (1750) A *New Grammar, with Exercises of Bad English, Or, an Essay Guide to Speaking and Writing the English Language Properly and Correctly*, London: Printed for the Author.

Fowler, William Chancy (1851) *English Grammar*, New York: Harper & Brothers

(First Published in 1850 New York: Harper & Brothers).

Greenwood, James (1711) *An Essay Towards a Practical English Grammar*; rpt. Menston: Scolar Press (1981).

Harrison, Ralph (1784) *Institutes of English grammar; containing I. The different kinds, relations, and changes of words. II. Syntax, or the right construction of ...*, (The 2nd edition) London: Printed for J. Johnson.

Harrison, Ralph (1794) *Institutes of English Grammar; Containing I. The Different Kinds, Relations, and Changes of Words. II. Syntax, or the Right Construction of ...*, (The 6th edition) London: Printed for J. Johnson.

Harrison, Ralph (1800) *Rudiments of English Grammar*, Wilmington: James Wilson.

Kerl, Simon (1868) *A Comprehensive Grammar of the English Language,* New York: Ivison, Phinney, Blackman & Co. (First published in 1861).

Knowles, John (1785) *The Principles of English Grammar with Critical Remarks and Exercise of False Construction*, Liverpool: H. Hodgson.

Knowles, John (1796) *The Principles of English Grammar with Critical Remarks and Exercise of False Construction*, London: Printed for the Author.

Lennie, William (1866) *The Principles of English Grammar*, Montreal: John Lovell (First printed in 1810).

Lowth, Robert (1762) *A Short Introduction to English Grammar*; rpt. Menston: Scolar Press. (1967).

Miege, Guy (1688) *The English Grammar*, rpt. Menston: Scolar Press (1969).

Murray, Lindley (1795) *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners*; rpt. (1968) Menston: Scolar Press.

Murray, Lindley (1795) *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners* (*the 1st edition*), York: Wilson, Spence, and Mawman.

Murray, Lindley (1796) *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners* (*the 2nd edition*), York: Wilson, Spence, and Mawman

Murray, Lindley (1797) *English Exercise, Adapted to the Different Classes of Learners* (*the 3rd edition*), York: Wilson, Spence, and Mawman.

Murray, Lindley (1798) *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners* (the 4th edition), York: Wilson, Spence, and Mawman.

Murray, Lindley (1799) *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners* (the 5th edition), York: Wilson, Spence, and Mawman.

Murray, Lindley (1809) *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners* (the 16th English edition, Improved by the Author), New York: Collins and Perkins.

Murray, Lindley (1868) *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners* (the 64th edition), London: Longmans, Green, and Co.

Murray, Lindley (1907) *English Grammar, Adapted to the Different Classes of Learners* (the 77th impression of the 66th edition printed in 1875), London: Longmans, Green, and Co.

Pickbourn, James (1789) *A Dissertation on the English Verb*,; rpt. Menston: Scolar Press (1968).

Postlethwaite, Richard (1795) *The Grammatical art Improved: in Which the Errors of Grammarians and Lexicographers are Exposed; Twelve Tenses are Explained* London: printed for J. Parsons.

Reed, Alonzo & Brainerd Kellogg (1880: 216) *Higher Lessons in English*, New York: Clark & Maynard (First published in 1877?).

Shaw, John (1788) *A Methodological English Grammar* (The Third Edition), London: W. Richardson; Manchester: J. Prescott.

Swett, Josiah (1844) *Swett's Grammar: An English Grammar*, Windsor Vt: J. Swett (The first edition appears to have been published in 1843).

Story, Joshua (1783) *An Introduction to English Grammar* (*The Third Edition*), London: Longman and T. Evans.

Thring, Edward (1851) *The Elements of Grammar Taught in English*, Cambridge: Macmillan & Co.

Ussher, George Neville (1785) *The Elements of English Grammar,* ..., Loudou: T. Evans, Pater-Noster-Row.

Vickroy, Thomas Rhys (1868) *The Principles of English Grammar*, Philada: J. A. Baucroft.

Ward, John (1758) *Four Essays upon the English Language*: rpt. Menston: Scolar Press.

Ward, William (1765) *An Essay on Grammar*; rpt. Menston: Scolar Press (1969).

Webster, Noah (1784) *A Grammatical Institute, of the English Language,* Hartford: Hudson and Goodwin.

Webster, Noah (1787) *A Grammatical Institute, of the English Language,* (The Third Edition), Philadelphia: Young and M'Culloch.

Webster, Noah (1790) *A Grammatical Institute, of the English Language,* (Thomas and Andrews's First Edition, with many corrections and improvements, by the Author), Boston: Isaiah Thomas and Ebenezer T. Andrews.

Weld, Allen H. (1848) *Weld's English Grammar*, Portland: Sanborn & Carter (First printed in1845?).

Whitney, William Dwight (*1886*) *Essentials of English Grammar for the Use of Schools*, Boston: Ginn & Co. (First published in 1877 London: Henry S. King).

Woodbridge, William (1800) *A Plain and Concise Grammar of the English Language;*

Containing Large Exercise of Parsing and Incorrect English, Middleton Connecticut: T. & J.B. Dunning.

Secondary Sources

Alston, R. C.（1974）*A Bibliography of the English Language from the Invention of Printing to the Year 1800*（A Corrected Reprint of Volumes I-X Reproduced from the Author's Annotated Copy with Corrections and Additions to 1973. Including Cumulative Indices）, Ilkley: Janus Press.

Austin, Frances（ed.）（1991）*The Clift Family Correspondence 1792-1846*,（Centre For English Cultural Tradition and Language, The University of Sheffield,）Sheffield: Cectal.

Austin, Frances（2003）"Whatever happened to Lindley Murray? A Study of Some of the Grammar Textbooks Used in the Early Teacher Training Colleges," *faculty.education.illinois.edu/westbury/.../Austin.rtf*

Bando, Yoko（2008）"The Progressive in Jane Austen's Works: Analysis of their Verb Types." The 25th Modern English Association Conference Handout.

Bax, Randy Cliffort（2008）"Foolish, Foolisher, foolist: Eighteenth-century English Grammars and the Comparison of Adjectives and Adverbs," in Ingrid Tieken-Boon van Ostade（ed.）*Grammars, Grammarians and Grammar-Writinging in Eighteenth-Century England*, 279-288.

Beal, Joan（2004）*English in Modern Times 1700—1945*, London: Oxford University Press.

Denison, David（1998）'Syntax,' in S. Romaine（ed.）*The Cambridge History of the English Language*, Volume IV: 1776-1997. Cambridge: Cambridge University Press, 92-326.

Hirtle, Walter H. and Claude Bégin (1991) "Can the Progressive Express a State?," *Langues et Linguistique: Travaux du Départment de langues et linguistique* 17, 99-137.

González-Díaz, Victorina (2008) "On Normative Grammarians and the Double Marking of degree," in Ingrid Tieken-Boon van Ostade (ed.) *Grammars, Grammarians and Grammar-Writinging in Eighteenth-Century England*, 289-310.

Görlach, Manfred (1998) *An Annotated Bibliography of Nineteenth-Century Grammars of English*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Labov, William (1972) *Sociolinguistic Patterns*, Oxford: Basil Blackwell.

Michael, Ian (1987) *The Teaching of English: From the Sixteenth Century to 1870*, Cambridge: Cambridge University Press.

Michael, Ian (1991) "More than Enough English Grammars", in Leitner, Gerhard (ed.), *English Traditional Grammars: An International Perspective*, 11-26.

Mittwoch, Anita (1988) "Aspects of English Aspect: On the Interaction of Perfect, Progressive and Durational Phrases," *Linguistics and Philosophy* 11, 203-254.

Osselton, Noel E. (1980) "Points of Modern English Syntax," *English Studies* 61, 454.

Rothwell, James (1797) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Warrington: P. L. Wigan.

Nehls, Dietrich (1988) "One the Development of the Grammatical Category of Verbal Aspect in English," in Klegraf, J and D. Nehls (eds.) *Essays on the English Language and Applied Linguitics on the Occasion of Gerhard Nickel's 60th Birthday*, 173-198, Heidelberg: Julius Groos Verlag.

Percy, Carol (2004) "Consumers of Correctness: Men, Women, and Language in

Eighteenth-century Classified Advertisements," *New Perspectives on English Historical Linguistics: selected papers from 12 ICEHL, Glasgow, 21-26 August 2002. Volume I: Syntax and morphology*, ed. Christian Kay, Simon Horobin, and Jeremy Smith. Current Issues in Linguistic Theory 251. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins, 2004. 153-176.

Percy, Carol (2008) "Mid-century Grammars and their Reception in the *Monthly Review* and the *Critical Review,*" in Tieken-Boon van Ostade, Ingrid, (ed.) *Grammars, Grammarians and Grammar-Writing in Eighteenth-Century England* ed. by Berlin: Mouton de Gruyter, 125-142.

Percy, Carol (2009) "Periodical Reviews and the Rise of Prescriptivism: The *Monthly* (1749-1844) and *Critical Review* (1765-1817) in the Eighteenth-Century," in Tieken-Boon van Ostade and van der Wurff (eds.) *Current Issues and Late Modern English*, Bern: Peter Lang, 117-150.

Tieken-Boon van Ostade, Ingrid (2006) "Eighteenth-century Prescriptivism and the Norm of Correctness," in Ans van Kemenade and Bettelou Los (eds.) *The Handbook of the History of English,* Oxford: Blackwell, 539-557.

Tieken-Boon van Ostade, Ingrid (2011) *The Bishop's Grammar: Robert Lowth and the Rise of Presriptivism.*

Watts, Richard J. (1999) "The Social Construction of Standard English: Grammar writers as a 'Discourse Community,'" in Bax, Tony and Richard J. Watts (eds.) *Standard English: The Widening Debate* eds. by Routledge: London and New York.

Smith, Carlota S. (1981) "The Futurate Progressive: not Simply Future + Progressive," *CLS*, 361-82.

Smith, Catherine (2004) "Use of Progressive Aspect in 18th-Century English: A

Study of Personal Letters," in Isabel Moskowich-Spiegel Fandino & Begona Crespo Garcia, (eds.) *New Trends in English Historical Linguistics: An Atlantic View*, 151-186.

Wischer, Ilse (2003) "The Treatment of Aspect Distinction in Eighteenth and Nineteenth-century Grammars of English," in Marina Dossena and Charles Jones (eds.) *Insights into Late Modern English*, Bern & Berlin: Peter Lang.